

2022年9月4日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 10章 32～45節

説教題：御国の備え

「僕らはみんな生きている」という映画があります。日本のビジネスマンが、東南アジアのある国で、内戦に巻き込まれながらもしぶとくビジネスを展開する様子を描いた映画です。ストーリーは良く覚えていないのですが、印象に残っている場面があります。主人公が自分の父親のことを回想して語る場面です。大企業の部長だった父親には、毎年300通の年賀状が届いていました。ところが退職した次の年の正月、年賀状が3通しか届かなかったのです。父親は「こんなはずはない」と言って、外に出て郵便屋さんが来るのを待っていました。しかし、結局3通だった。父親は「俺の人生は何だったのか」と呆然とするのです。「大企業の部長職」という華やかな立場も、彼にとって人生の目的地ではなかった、過ぎ去って行くものに過ぎなかった、ということです。

教えられるのは「過ぎ去って行く目的ではなく、人生の真の—(最終的な)—目的地に向かって生きて行くことの大切さ」です。私達はそれを「天国—(主にお会いする時)—」に置きます。その最終的な目的地に向かうために相応しい生き方をしたいと願うのです。それはどのような生き方なのか。

今日の箇所は、そのようなことを語る箇所です。「内容」、「信仰生活への適用」をお話しします。

### 1：内容～ヤコブとヨハネの願い

イエスは、エルサレムに向かって歩みを進めておられました。その道すがら3度目の「受難予告」をされます。しかし、ここで語られたのは受難の予告だけではありません。イエス様は最後に「しかし、人の子は三日目の後に、よみがえります」(34)と、受難と同時に復活の予告、勝利の予告もされるのです。受難の予告ですから、全体として暗いトーンです。しかし、その暗い受難の向こうにある勝利について語られるのです。しかし、その勝利について、勝手に理解して、イエス様の許にやって来たのが、ヤコブとヨハネです。彼らはイエス様にお願いをします。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください」(37)。

彼らは、イエス様が最後はローマ帝国を追い払って、ユダヤ人の新しい国を再興して下さる、神の祝福に満ちた国を造って下さる、そういう夢をイエス様に託してついて来ているのです。彼らは「その国で右大臣、左大臣にしてくれ」と頼んだのです。それはそれで、真剣な願いだったと思います。彼らなりに真剣に、イエス様の支配なさる国のことを考えていたのでしょう。42節、43節に「偉い」という言葉が出て来ますが、この言葉は「大きい」という意味の言葉です。当時の人々は「やがて神が『来るべき世』をもたらして下さるに違いない」と期待し、その世界に対するイメージを持ち、その中で大きな存在になりたいと願っていました。神の目に大きな者となること、それは、私達も願って良いことではないでしょうか。

しかし、神の目に大きな者となること、イエス様の近くにあるということ、それは、本当はどういうことなのか、彼らは分かっていないのです。それでイエスは言われました。38節を意識します。

「あなた方の願いは聞いて上げよう。しかし、あなた方が願っていること、私の傍らにあって大きな存在となるということがどういうことなのか、あなた方には分かっていないようだ。それは私の飲む盃を飲み、私の受けるバプテスマを受けることなのだよ」。イエス様の飲む盃とは何か。イエス様の受けるバプテスマとは何のことでしょうか。聖書では、「杯」とは「苦しみ」を表現します。イエス様はゲッセマネの園で「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください」(ルカ 22:42)と祈られました。そのイエス様の苦しみを分かち合うこと、それがイエス様に近くあるということです。バプテスマも、本来の意味は「水の中に全身を浸す」ということです。ですからここでは「苦しみに耐えて、その中に全身を浸してしまうこと」が言われているのです。それが大きな存在になるということなのです。繰り返しますが、彼らには、それが良く分かっていなかったでしょう。イエス様の最も近くにあるということ、それが、イエス様の苦しみを分かち合うことだということが分かっていなかったのです。

しかし、良く分かっていなかったのは、ヤコブとヨハネだけではなくのことです。41節「十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた」(41)。なぜ腹を立てたのか。「俺達を出し抜いた」と言って腹を立てたのです。弟子達の皆が、イエス様の最も近くにあつて、人の上に立ちたい、人の上に立って支配したい、そういう願いを持っていたのです。そこにイエス様は、人間の根本的な問題を見られました。天国の価値観とぶつかる自我の価値観を見られたのです。

それでイエス様は、天国を目指す者の生き方の核心的な価値を語られました。42節から「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのももべになりなさい」(42~44)。人の上に立ちたい、人を支配したいと願う弟子達に対して、「そうではなく、仕える者になれ、しもべになれ」と言われました。

なぜ、「仕える者」になることが弟子の道なのか。なぜ、しもべになることを目指さなければならぬのか。イエス様は言われます。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」(45)。彼らの主であり、彼らが最も近いところにいたいと願ったイエスご自身が、神の子、王の王である方なのに、仕えられるためではなく、仕えるために来られたし、罪を犯さずには生きて行けない、そのために、本来地獄に向かって歩むしかない私達のために、罪の贖いの代価として、自分自身を差し出す生き方をされたのです。

ちなみ「贖いの代価」というのは「人のある束縛から自由にする」ために払われるものです。米国のリンカーン大統領は、ある時こんな光景を見たそうです。1人の黒人少女が奴隷市場で売りに出されました。奴隷商人は、少女の服を剥ぎ取って「健康だよ」と呼びかけました。セリで値段が上がり上がり、最終的に2人の買い手が残りました。1人は大農場の農場主、もう1人は教会の牧師でした。値段が1500ドルになった時に、農場主が降りて、黒人の少女は牧師のものになりました。回りの人が牧師に聞きました。「その奴隷をどうするのか」。牧師は言いました。「自由にする」。彼は、1人の奴隷を自由にするために—(200年近く前の1500ドルです)—恐らく全財産をはたいたのです。それが「贖いの代価」です。イエス様は、私達を死からも、悪の力からも自由にするために、自分自身を与え尽くす生き方をされたのです。そのイエス様に近くあるということは—(繰り返しますが)—イエス様に倣って「仕える生き方」をすることなのです。

## 2: 適用~仕える生き方

最初に「天の御国に向かって永遠の価値のある生き方をしたい」と申し上げました。その生き方を、イエスはここで教えて下さっているのです。それは「仕える者になる」、「仕える生き方をする」ということです。

しかしその生き方は、おそらく私達の自我に真っ向からぶつかる生き方なのです。私達は、人に仕えるより仕えられたいのです。人の先に立ちたいのです。ある人が言いました。「人間は支配合戦を繰り返している。意識しているかどうかは別として、相手を支配して、相手を自分の願い通りに動かそうとする」。夫婦の間で、家族の間で、色々な人間関係において、どうして私達は不機嫌になるのでしょうか、イライラするのでしょうか。それは「人が自分の願ったように動いてくれない、してくれない」と言って不機嫌になっているのではないのでしょうか。相手を自分の思うように動かしたいと願う。それは—(激しい言い方をすれば)—「支配したい」と願うことではないでしょうか。身近な人間関係から、国と国との争いに至るまで、私達は、そういう考え方に縛られているのではないのでしょうか。

そんな人の世に、天の御国の全ての栄光を捨てて、イエス様は飛び込んで来て下さったのです。仕えるために、多くの人を贖いとして自分の命を差し出すために、来て下さったのです。支配合戦を繰り返している私達の一番嫌うことは何でしょうか。小さく見られること、低く見られること、

馬鹿にされること、恥をかかされること、無視されること、評価されないこと等々ではないでしょうか。しかしイエス様は、その全てを引き受けられたのです。呪いの言葉を口にせず、復讐せず、罵られても罵り返さず、人に仕え尽くし、人を愛し尽くし、十字架に至るまで、黙々とそのような道を歩まれたのです。当時の宗教家がイエス様のことを理解出来なかったのは、そのような姿勢です。宗教家も支配合戦の中にいたのです。そんな中でイエス様の「下に、下に行く生き方」は、彼らには理解出来なかった。結局イエス様は、人の目には最低の生き方をされました。既に600年前、イザヤ書はイエス様のことを「人が顔をそむけるほどさげすまれ」(イザヤ 53:39)と預言していました。しかしその「仕える生き方」、「僕としての生き方」は、神が人に願っておられる「人のあるべき生き方」だったのです。だから神の目には、最も偉大な生き方でした、偉大な生涯でした。それが神の見方でした。だから神様は、イエス様を甦らせました。そして天に引き上げ、神の右の座に着かせられたのです。

斉藤宗次郎という人を以前もご紹介しました。宗次郎は1877年、岩手県花巻市で生まれました。小学校の教師になり、内村鑑三の影響を受けて聖書を読むようになりました。そして1900年、23歳で洗礼を受け、花巻市で初めてのクリスチャンになりました。キリスト教がまだ「耶蘇教」とか「国賊」とか呼ばれ、人々から迫害を受けていた時代でしたから、彼はクリスチャンになった日から、親からは勘当され、町を歩いていると「ヤソ」「ヤソ」と嘲られ、石を投げられた。そして、謂われのない中傷を何度も受け、ついには小学校の教師を辞めるはめになります。また宗次郎の長女は、「ヤソの子供」と言われ、腹を蹴られ、それが元で腹膜炎を起し、9歳という若さで天国に帰りました。それでも彼は、信仰に生き続けたのです。教師を辞めた彼は、新聞配達をして生活をするようになりました。毎朝3時に起きて、雨の日も、風の日も、20kg以上ある新聞の入った風呂敷包みを背負って駆け足で配達して回りました。また、あのように自分の娘を失ったのにかかわらず、冬に雪が積もると、彼は小学校への通路を雪かきして子供達のために道を作りました。小さい子供は、抱っこをして校門まで運んで上げました。自分の娘を蹴って死なせた子供達のために働いたのです。彼は雨の日も、風の日も、雪の日も休むことなく、地域の人々のために働き続けました。また、新聞配達の帰りには、病人を見舞い、励まし、慰めました。やがて彼は、東京に引越することになりました。見送る人はいないだろうと思っていましたが、彼を見送るために、彼を迫害していたはずの町長や、学校の先生や、沢山の生徒、また神社の神主、お寺の僧侶、町中の人々が集まりました。駅は200人の人で一杯になりました。人々は、宗次郎がいつもしていたことを見ていて、感謝をしにやって来たのでした。その中に、あの宮沢賢治もいたのです。宮沢賢治は、日蓮宗の信者でしたが、宗次郎が東京に着いて最初に受け取った手紙は、賢治からの手紙でした。やがて賢治は、宗次郎の姿を下敷きに有名な「雨ニモマケズ」の詩を書きます。詩の最後は「そういう者に—(宗次郎のように)—私はなりたい」と結ばれています。賢治は、宗次郎の姿に感銘を受けたのです。なぜでしょうか。支配合戦、人間と人間がいがみ合い、憎しみ合う世界にあって、彼の「仕える生き方」は、賢治の心を打った。あるいは宗次郎の仕える姿は、あれ荒んだ町の人々の心を癒したのです。それは、それこそが人の生きるべき本来の生き方、真実の生き方だからだと思います。天国から見ても偉大な生き方だからだと思います。だからこそイエス様は、私達にも仕える生き方をしないと—(「それこそが天国を目指す者の求める生き方だ」と)—言われたのではないのでしょうか。

しかし私達は、私達の自我に真っ向からぶつかる「仕える」という生き方が出来るのでしょうか。ある人が言いました。「自分の妻に、夫に、家族に、同僚に…1日でも仕えようとするのが苦しい。『何で俺が(私が)こんなことをしなければならぬのか』というような思いが湧いて来る」。もちろん、仕えるということは、相手の言うことを何でも聞いて、ハイハイと従うことではない。それは何より、心の姿勢、生き方の姿勢の問題です。相手を生かそうとする積極的な生き方だと思います。そしてそれは、そのまま「愛すること」と言い換えても良いと思います。その意味で、ある牧師が言いました。「愛するということは、耐え難いことを耐えることだ」。愛するということは、本当に愛するということは、こちらが幸せを感じるというようなこととは少し違うのではないのでしょうか。

それは相手を生かすことなのです。そしてそれは、きっと苦しい、難しいことなのです。でもマザー・テレサは言いました。「苦しみは、それ自体は虚しい。しかし、キリストの受難を分かち合うための苦しみは素晴らしい。キリストの苦しみを分かち合う苦しみは美しい。人が神に捧げ得る最も美しい贈り物は、キリストの苦しみを分かち合うことです」(マザー・テレサ)。イエス様は、人を生かすために、立て上げるために苦しみました。私達も、人を生かすために、誰かの心を癒すために、苦しむ時、それはキリストの苦しみを分かち合っているのではないのでしょうか。それは、決して虚しい苦しみではない。神の前に大きな生き方なのです。

しかし、それでも難しい。しかし最後の部分にこうあります。「偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい…人の先に立ちたいと思う者は、みなのももべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり…」(43~45)。イエス様が「そうしなさい」とおっしゃるのです。「私達にも、仕える生き方、僕となる生き方が出来る」ということではないのでしょうか。

ヤコブとヨハネは、イエスの十字架の時は逃げてしまいましたが、主の復活の後、やがてヤコブは、主の証しのために殉教します。ヨハネは長い生涯を生きますが、その生涯、キリストのために犠牲を捧げ続けるのです。2人の在り方は異なりました。でも2人とも、主の苦しみを分かち合うことが出来たのです。そして私達も、同じイエス様の弟子なのです。弟子として「身の丈に合った仕える生き方」があるのではないのでしょうか。なぜなら私達も、同じようにイエス様に仕えてもらっている者です。命まで下さるほどに仕えて頂きました。いや、もっと身近に言うと、礼拝がそうです。礼拝のことを英語では「サーヴィス」と言います。奉仕です。それは、神が私達に奉仕して下さる、という意味でのサーヴィスなのです。私達は礼拝の場で霊的な、信仰的な、何かを頂くのではないのでしょうか。そのように礼拝を通して、祈りを通して、御言葉を通して、神が私達に仕えて下さるのです、私達を支えて下さっているのです。私達は、「私には出来ない」と思うかも知れません。しかしCS ルイスは言いました。「失敗しても気にせず、またやり直せばよい…神の助けは、多くの場合、何回もやり直すという力を増すために与えられる」(CS ルイス)。何度も失敗しながら、でも神の助けを頂いて「仕える生き方」を求めて行きたいと願います。そこで私達の内にて育てられる品性、それこそが、私達が天の国に持って行けるものだし、神の前に大きなものなのです。

イエスは40節で「わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです」(40)と言われました。私にはこの言葉は「私達のその生き方に対して、神様が相応しい報いを備えていて下さる」、そのようなメッセージとして響いて来るのです。だから後のことは全て神に委ねて、仕える生き方、人を真に愛する生き方、にチャレンジして行きたいと願うことです。天国に持って行ける品性を育てる、それこそ、私達がこの地上で為すべき大切な御国の備えです。